



動物行動の観察入門

出版社：白揚社

マリアン・S・ドーキンス著 黒沢令子訳

A5判上製・224ページ 定価：3,600円(税別)

ISBN 978-8269-0183-3

本書は、表題の通り動物行動の観察に関する入門書である。卒業論文で動物行動を履修しようとしている大学学部生や、他の資料も基に自ら研究計画を作成する修士課程の学生向けに書かれている。高校生でも適切な解説を受ければ、ほとんどの部分を理解できるだろう。つまり、動物行動観察に関する一通りのことはすべて網羅されている。また、多くの内容が実際の研究事例とともに記載されており極めてわかりやすい。入門者には、必読の書である。

本書は、行動観察の入門書であるから、観察の重要性を冒頭に記載するのは当然であるが、観察の特長として、実験と異なり場所を問わずありのままの状態で動物行動を研究できると述べている。因果関係と相関関係(関連性)というキーワードを使って、実験と観察の違いを説明している。やはり因果関係に踏み込んで検討する際には、実験が強力なツールになることを、著者は最初に確認している。

もちろん因果関係の証明は、実験だけでの特技ではなく、適切な方法に従えば、観察でも相関関係と因果関係の区別は可能である。本書で言う、実験は「科学研究の王様」、観察は「戦地で指揮を執る将軍」とは言い得て妙である。こうした観察の有効性が、いくつかの行

動研究の実例とともに、本書では語られている。

本書の構成は、まず「何を解明しようとしているのか?」、すなわち研究実施に当たって問いかけの明確さを求めるべきとの考えを、いくつかの例を挙げながら説明している。これを具体的にするため、研究計画の原則を、次に述べている。さらに、観察データの集め方を解説して、入門者が最も知りたい農場や動物園および野生下での観察の方法を解説する。つまり、各項目について概論と各論風に記述が行われている。各論だけ見ると、現在、用いられているより多様な方法には対応できていないが、概論部分と組み合わせることで、研究発表会などで研究者が採用している、ここには記載されていない観察法についても理解することができる。また、本書の最後に書かれている、「観察法の今後の発展」がすでに現実となっており、これ以上に観察法が進化している現状には発展の現実味を強く感じる。

観察データの集め方に続いて、観察結果の解析を、ごく基本的な統計手法であるが紹介している。観察に基づく研究では、この統計手法がカギを握ることもあり、実際に研究する場合には、他の参考図書の力を借りる必要があるだろう。

繰り返しになるが、本書は、学部生や修士課程の学生向けの内容である。動物行動学を目指す学生諸子には、研究を始めるにあたり、じっくり読み込むことを勧める。一方、動物行動研究を生業としている私たちも、常に傍らに置き、新たに研究計画を練ったり、解析結果を検討する際に、確認のために利用することを勧める。そういった価値のある、有効な本である。

(酪農学園大学 家畜管理・行動学 森田 茂)